

# 全国漢文教育学会

## 第39回（通算69回）大会のご案内

期 日 2024（令和6）年7月12日（金）・13日（土）

会 場 北海道教育大学旭川校（旭川市北門町9丁目）  
大会準備会代表 大橋賢一教授（当日緊急連絡先 Tel0166-59-1442 大橋研究室直通）

開催形態 対面・リモート併用のハイブリット方式  
\*但し、研究授業は、リモート参加できません。



QRコード  
学生申込用

参加費 会員 1,000円 一般 2,000円 学生 無料 \*リモート参加も同額。  
研究授業のみ参加 500円（資料代として。会員・一般共通。学生は無料。）  
\*学生参加者（会員・非会員）は右QRコードより事前に申し込みをお願いします。

申込方法 同封の「払込利用票」で、6月末日までにお申し込みください。  
\*リモート参加の場合は、参加費払込を確認のうえ、入室を許可します。  
ZoomのURLは、前日までに本学会ホームページに掲載します。

日 程 **第1日** 研究授業、研究協議、全国理事・評議員会

研究授業 14:20～15:05

会場 北海道教育大学附属旭川小学校 3階（旭川市春光4条1丁目）  
\*授業開始10分前を目途にお越しください。校内の移動は静粛に願います。  
担当 福西晟歩（ふくにし あきほ）教諭  
学年・教材 小学6年「漢字の広場2 複数の意味を持つ漢字」  
使用教科書 教育出版「ひろがる言葉 小学国語 6上」

研究協議 15:40～16:40

会場 北海道教育大学旭川校第1会議室（P棟307教室）  
\*小学校から大学への移動は、マイクロバスを用意する予定です。

全国理事・評議員会 16:50～17:50

会場 北海道教育大学旭川校第1会議室（P棟307教室）

**第2日** 研究発表、講演、総会

開会式 9:45～9:55

会場 北海道教育大学旭川校（P棟307教室）  
\*以下、総会まで同教室で行います。

研究発表 小中高の部 10:00～12:00

昼食休憩 (各自) 12:00～13:00

研究発表 大学の部 13:00～14:00

記念講演 14:10～15:10

総 会 15:15～15:45

閉 会 式 15:45～15:55

- そ の 他
- ① 荒天等により、開催形態に変更が生じた場合は、本学会ホームページで告知します。
  - ② 今回は、史蹟研修、懇親会は実施いたしません。
  - ③ 第2日の昼食は、各自ご用意ください。近隣にコンビニエンスストアが複数あります。会場内（P棟1階）には自動販売機があり、飲料が買えます。
  - ④ 第2日は会場内P棟2階踊り場（第1会議室下）に出版社が出店します。  
出店予定者名（5月16日現在、五十音順）：大修館書店

## 研究発表要旨

### 【小中高の部】

#### 中学校と高等学校をつなぐ授業の実践—『平家物語』と『日本外史』の比較読みを通して— 奥山 晃 (旭川市立永山中学校)

中学生にとって、漢文はとりわけ抵抗感が強い。彼らが抵抗感を持つのは、漢文学習を行う配当時数が少なく、十分な知識が身につけられないことにより、漢文が単なる漢字の羅列に見えてしまい、学習の意義を感じとりにくいことなどが、主な理由となっている。そうした状態で高等学校に進学することが生徒の「漢文嫌い」にさらに拍車をかけてしまう恐れがある。

そこで、漢文に対する抵抗感を少しでも緩和させるために、『日本外史』「那須宗高」を教材とした授業実践を行ってみた。『平家物語』「扇の的」は、中学二年生で既習事項であり、予備知識がある。那須与一の活躍が生き生きと描かれた「扇の的」は、中学生にとって強く印象に残る物語の1つである。

本単元は「古文（和文体）と漢文（漢文訓読体）の比べ読みを通して、漢文訓読体の長所を把握する」ことを最大の目標としたい。「漢文訓読体の長所」とは、「端的に表現できるまとまりのよさ」にある。それは、歴史書として書かれた『日本外史』と、物語として書かれた『平家物語』という、文体の違いによるものが大きい。生徒にこの違いに気付かせることで、漢文訓読体のもつ意義、併せて和文との違いが感じられるように指導を試みた。古文「那須与一」を漢文「那須宗高」の比較対象として用いることが、中学校と高等学校の漢文学習の橋渡しとなる可能性があることを提案したい。

#### 言語文化「唐詩の世界」の実践報告 佐々木千紘 (旭川藤星高等学校) 大橋賢一 (北海道教育大学旭川校)

学習指導要領の改訂により、「国語総合」から「言語文化」に変わること、漢文を扱える授業時数が激減し、その影響は漢詩の学習にも及んでいる。時数軽減により、結果的に漢詩の基本事項を「教える」授業に偏り、いきおい漢詩の鑑賞がおろそかになってきている。

本実践では、漢詩鑑賞能力を向上させるべく、李白「静夜思」の翻案作成を通して漢詩の特徴やその魅力について、学習者自身が発見できる力を身に付けられるような授業を展開した。具体的には、あらかじめ翻案作成に向け、学習者に「春暁」の井伏鱒二による翻案・土岐善麿による翻案・散文調の教科書対応学習課題集掲載の現代語訳を比較検討させ、その長所・短所をまとめさせることで、翻案作成の基本を身につけさせた。その上で、李白「静夜思」を用い生徒自身に翻案をさせた。本発表では、学習者が翻案作成を通して漢詩の良さや作者の作詩の技術の高さに気づくことのできる授業を提案し、漢詩の鑑賞能力を向上させるための一方法を示してみたい。

#### ユニバーサルデザインに留意した漢文導入授業の実践—「朝三暮四」を用いて— 須賀太陽 (京都府立京都八幡高等学校)

本発表では漢字表記等に苦手意識をもつ生徒への漢文指導の実際として、1年次の「言語文化」の漢文教育の導入、及び「朝三暮四」(『列子』)の実践を中心に報告を行う。本校の生徒は例年、常用漢字が十分に身につけていないこともあり、漢文領域はつまづきを覚える点が多い。こうした生徒に対して、指導要領の指導事項に基づいた授業をどのように構想するべきか、私見を提示したい。具体的には、生徒は多様な「特性」を抱えているため、漢文導入授業にあたってはユニバーサルデザインに留意しつつ、「訓読の決まり」の理解を深めさせている。さらに、習得させた「訓読の決まり」を活用して、「朝三暮四」を読解させる。こうした実践報告をとおして、漢文教材の教育的価値についても考えたい。加えて、授業中での生徒のつまづきや、授業をとおした考えの変化についても報告する。

#### 漢文文法論とサブテキストの提案 薄井俊二 (埼玉大学名誉教授) 鹿島脩太 (千葉大学大学院)

現在日本では、中学高校で漢文を学ぶが、文法についてどの程度教えておくかについては、教科書でもまちまちであり、おそらく現場の先生方もまちまちではないか。また語順などの文法論をどう説明するかについても、実は教科書によってまちまちであり、文部科学省も一定の基準などは示していない。しかし、英語という外国語を学ぶにあたって、ある程度文法について共通認識を得ておく必要があるように、中国古典文語文である漢文を学ぶにあたって、ある程度漢文の文法をおさえておくことは有効ではないかと考える。

そこで、今回の発表では、先ず「漢文の文法説」の「構文論」について私論を提示して、問題提起をした上で、それをおさえた上での初学者向けのサブテキストについて、提案をしたい。

また、これらの理論に基づく教育実践の試みについても、可能な限りで報告したい。

## 【大学の部】

### 司空曙送別詩論

福原早希（筑波大学大学院）

司空曙（740?～805?）は、中唐前期にあたる大暦の時代に活躍した詩人であり、盧綸・錢起・崔峒・耿漳らと共に「大暦十才子」の一人に数えられている。安藤信廣『中国文学の歴史 古代から唐宋まで』（東方書店、2021年）は、大暦十才子の特質について「優雅・平明な表現をたいせつにし、情感に富む世界を好んだ」と述べている。司空曙は大暦十才子の中核をなす詩人だが、日本における大暦十才子の研究では、主に盧綸・錢起が取りあげられ、司空曙の詩歌については殆ど顧みられることが無く、その特色は見過ごされてきた。

本発表では、全174首現存する司空曙の詩歌の中で最多を占めている壮行の詩歌、いわゆる「送別詩」を中心に分析・検討することで、その特色の一端について私見を述べたい。

### 辺塞詩としての蝦夷漢詩——幕末道南にゆかりの詩人を中心に——

泊 功（函館工業高等専門学校）

領土拡大とともに辺境が広がっていった盛唐時代に盛んに作られた辺塞詩は、唐詩の模倣から入った日本の詩人によっても作られてきた。古くは『懷風藻』に残る藤原宇合「奉北海道節度史之作」や絶海中津「出塞図」などが知られるが、江戸に入ってから盛唐詩を模倣した木門や、護園学派の詩人たちによって作られた。ただし、本家の辺塞詩も多くがそうであるように、彼ら日本人作の辺塞詩も題材として辺塞という文学空間を借りただけで、実際の辺塞体験によって作られたものではなかった。

しかし、十八世紀以降、領土的野心をもってロシアが蝦夷地を目指して南下してきてからは、その状況が変わった。蝦夷地は地政学的な境界＝国境未画定地帯と化したのである。そして現地松前藩や東北諸藩は、幕命によって北蝦夷（カラフト）を含む蝦夷各地に、ロシアからの防備のため「辺塞」を築いた。その結果、蝦夷地警備の勤番、あるいは探検家や役人として蝦夷地を訪れた詩人たちが、実体験に基づいた「辺塞詩」を詠み始めたのである。本発表ではその一端を紹介したい。

## 記念講演要旨

### 杜甫「春望」再読

後藤秋正（北海道教育大学名誉教授）

杜甫「春望」は中学・高校ともに多くの国語教科書で扱われている。

それでは「春望」の解釈には疑問点がないのであろうか。私見によれば、まだ検討されなければならない余地が残されている。箇条書きにすれば、

㊶制作時期。㊷「国」と「城」の意味。㊸「山河」と「草木」の含意。㊹「感」・「濺」と「恨」と「驚」の主語。㊺「連三月」の意味。㊻「家書」は届いていたか。

となろうか。これらについて私見を述べ、時間に余裕があれば「自京赴奉先県、詠懷五百字」の「朱門酒肉臭」の句の解釈にも触れてみたい。

※第1日、研究授業会場（附属小学校）へのアクセス

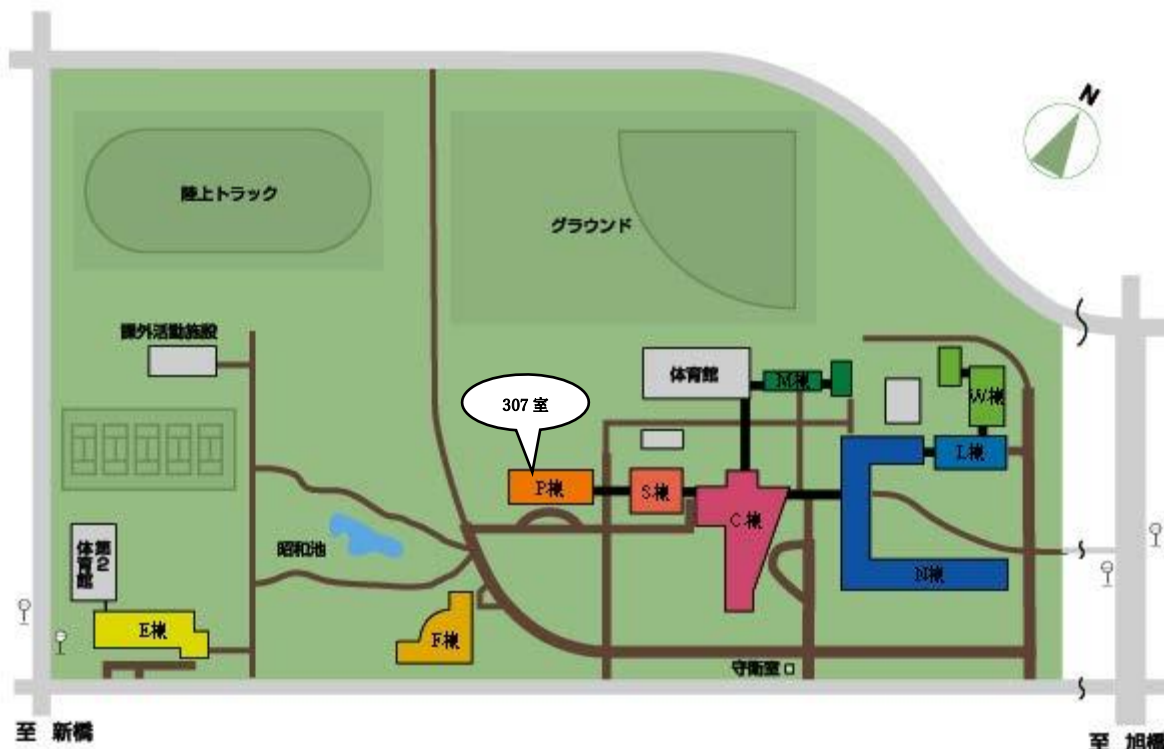
【旭川電気軌道】☆旭川駅発 522 番線 13:39 発 13:55 着  
☆1条8丁目発（駅近く）12番線 13:10 発 13:26 着

【道北バス】☆旭川駅発 29 番線 13:30 発 13:48 着

※第2日、大学へのアクセス（下記地図参照）

【旭川電気軌道】☆「5番旭町・春光線」で15分、バス停「旭町2条10丁目」下車、徒歩5分。  
☆「14番旭町線」で15分、バス停「旭町2条10丁目」下車、徒歩5分。  
☆「24番新橋・北門線」で15分、バス停「北門9丁目」下車、徒歩5分。

※最新の運行情報を各社ホームページにて御確認のうえ、お越してください。



（上記のアクセスマップ・構内マップは、いずれも北海道教育大学旭川校ホームページより転載。）